

学校の怪談 行事編

5分間の恐怖
中村まさみ
Masami Nakamura

のろわれたプール



9784323059372



1928393014000

ISBN978-4-323-05937-2
C8393 ¥1400E

定価(本体1,400円+税)

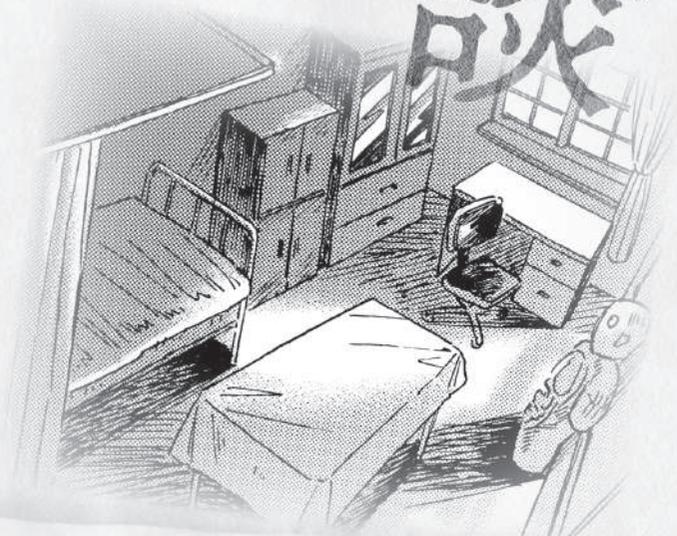


金の星社

のろわれたプール

中村まさみ

学校の怪談
5分間の恐怖
【行事編】



わたしは怪談好きが集まるSNSのグループ

「ゴーストコンテツ」の管理人。

ここには、日本全国から怪異が集まってくるが、
おもしろいことに気づいた。

学校で行われるさまざまな行事。

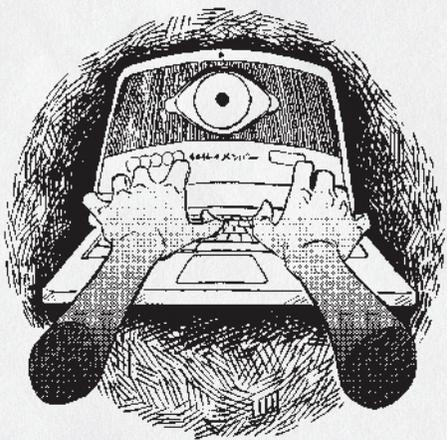
それにまつわる怪談がなんと多いことか！

そこで今回はとくべつに、ひなんくん練、身体そく定、

プール開き、学習発表会にまつわる怪談をおとどけする。

きみたちが通う学校でも、

こんなことが起こってはいないだろうか……？



もくじ

レポート1 むやみにさわってはいけない……………6

レポート2 せなかになにかいる!……………20

レポート3 水みなそこから……………38

レポート4 ひじょうベルにまざる音……………52

レポート5 ちょうちよ……………65

レポート6 使つかわれていないプール……………84

レポート7 ひまわりが見ている……………101

レポート8 なんでわたしなの!?!……………117

レポート9 ほけん室きよこの清子さん……………130

レポート10 お化ばけがいる!……………145

むやみにさわってはいけない

みんなは靈感れいかんとか、霊能力れいのうりきとかいうものをしんじるかな？

もつとかんたんにいうと、幽霊ゆうれいやお化けばけ、ときには妖怪ようかいのようなものが、見えてしまう力のことだよ。

おれが自分のそんな力に気づいたのは、わすれもしない、小学一年の夏休みに、島根しまねのおばあちゃんの家へとまりにいったときだった。

夜になり、ばんごはんを食べようとテーブルについたら、それまでいなかっ

たはずのおじいちゃんがすみにすわっていて、その人のまえにだけ、ごはんがおかれてないんだよ。

だからおれ、父さんに聞いたんだ。

「あれ？ おじいちゃんはごはん食べないの？」

そのとたん、みんなの動きうごきがぴたっと止まって、みんないっせいに「は？」って顔でおれを見たんだ。

「ほら、あのおじいちゃんだよ」

って、おれがいいながらふりむいたときには、そこに、だれのすがたもなく
てね。

もうわかるよね？ はじめからその場に、おじいちゃんなんかいなかったん

だよ。

「だ、だけど、おれ、はつきり見たよ、おじいちゃん。顔だっておぼえてるよ！」

っていったら、おばあちゃんがおくから、古いアルバムを持ってきた。

「このおじいちゃんだよ」

そこにあつた一まいの写真を指さしていったら、おばあちゃんはわつとなきでした。

そこに写っていたのは、おれが生まれるずっとまえになくなった、おばあちゃんのだんなさん……つまり、おれのおじいちゃんだったんだよ。

それから、おれは「生きていない人」を、たびたび見るようになったんだ

けど、父さんや母さんからは、人にはいわないようにつて、きびしくいわれてるんだ。

楽しかった夏休みも終わって、今週は学校公開。きょうは午後から、自由研究の発表会が予定されている。

タブレットが配られるようになって、今年はみんながどんな自由研究をするのかが、あらかじめわかるようになったんだ。

それでおれは、だれともかぶらないように、なにをえらんだかという……

「セミのぬげがらの数としゅるい・その利用方法」だ！

わけわかんないだろ？ でも、その研究のかいあって、びっくりするような

ことがわかったんだぞ。

あのぬけがらってさ、ただそこにあるだけで、なにかに使えるんじゃないか？　なんてだれも考えないよね？　だけどおれは発見しちゃったんだよ、その利用方法を……。

まずレジぶくろを……って、おれの研究の話はいいか。

実は、シュンヤっていうやつが、ちよつと気になる研究をしてきた。おれ、タブレットでやりとりしているときから、そのシュンヤのえらんだ題ざいが、みように気になってさ。

休みちゆうもなんどか電話して、「シュンヤ、だいじょうぶか？」って気にかけてたんだ。

シュンヤが自由研究にえらんだテーマ……。それは町はずれにあって、いまはほとんど使われていない、古いトンネルのれきし。

そのトンネルは、もともと、となり町とのいききのために作られたらしいんだけど、いまではきちんと整びされたバイパスが通っているから、わざわざ山を登って、そんな古くて小さなトンネルを使う人なんかいないんだよ。

シュンヤが、いったいどうしてこのトンネルを研究しようと思ったのか？　そのぎもんをいだいたのは、おれだけじゃなかったようだ。

せきじゆんにどんだん発表が進んでいって、いよいよ次はシュンヤの番……。というところで、それまでだまってみんなの発表を聞いていた、たんにんの先

生が口を開いた。

「シユンヤくん、発表のまえにまず、なぜこのトンネルを調べようと思ったのか聞かせてくれないか？」

先生のこの発言に、クラスじゅうのみんなが「うんうん」と首をたてにふっている。

シユンヤは、まるでそのしつもんを待っていたかのように、せきから立ちあがると、自しんにみちた表じょうで話しはじめた。

「みなさんは、あのトンネルがいつできたか、知っていますか？」

いまから百年以上もまえなんですよ。山にあなを開けて、人がそこを安全に

いきまできるようにする……それって、すごいことだと思いませんか？

いまではさいしんえいの大がたのきかいを使って、ほりすすむ位置なども、コンピューターで計算できますが、そのころはすべて人の頭で計算して、人の手でほりすすめたんです。

ぼくは、その作業員さんたちの苦ろうを知りたかったし、みんなにも知ってほしいと思い、自由研究の題ざいにえらびました」

それから、そのままシユンヤは調べたトンネルのれきしを、話しはじめた。ノートに書いた年表を見ながら、工事に関わった人の名前や会社、けんせつひ用や工事にかかった時間などを話していく。

ところが、トンネルを手作業でほりすすめているさいちゅう、なんども落ば

ん事が起きて、たくさんのお作業員さんが命を落としました……という話に入った
ころだった。

なんだか、シユンヤのようすがおかしくなってきた。

急に口調や身ぶり、手ぶりがあらあらしくなってきた、心配した先生が止め
に入ったんだけど、シユンヤはぜんぜんいうことを聞かず、ずっと話しつづ
けているんだ。しかも……

「わあは、わんざわんざ津軽つがるから出てきてはんで、まいぬずまいぬず、たんげ
仕事しごとはあすてらったばって、あすもこすもガタガタでや、『落おばんだず、にげ
れにげれ！』っていわっても、ちゃちゃつと動うごけらんだばって」
と、とつぜん、聞いたこともない方言でさけびはじめたんだ。

「国くにさ帰りてえ……帰りてえ」

そういいながら、そのうちぼろぼろとなきだしてしまった。

そのようすを見て、さいしょシユンヤのえんぎだと思ったみんなは、ゲラゲ
ラわらってただけど、「えんぎにしてはへんだよね？」とだれかがいったひ
とことをかわきりに、クラスのなかはパニックのようになってしまった。

教室のうしろで見ていたほご者しやの方々も、大さわぎになってたよ。

でもおれには見えてたんだ。

シユンヤが、トンネルで起こった事じこの話をしはじめたとたん、あいつのう
しろの方にぼやっとしたかげが出はじめて、やがてそれが人の形にかわって



いった。

いまのヘルメットとは少しがうものを、かぶっているのがはっきりわかった。うちの父さんと同じくらいのおじさんたち……。

顔はまっくろにすすけていて、あなだらけのぐん手をした手で、なんどもなんどもなみだをぬぐっていた。

しばらくすると、シユンヤはいつものシユンヤにもどって、なににかあったののというような顔で、あたりをきよろきよろ見まわしている。

「もうへんなおしばいまでして、ふざけすぎ！」

タイミングよく、だれかがいって、シユンヤの発表は終わり、せきにもどっ